

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.98 (深緑号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2025 年 7 月 1 日発行
<http://iidalaw.net/norikura.html>

※重要なお知らせ 会報のメールによる配信について

郵便料金等の諸物価が上昇しています。会費の値上げも検討しましたが、当面は以前から提案のあった「会報の PDF でのメール配信」を行うことで印刷費・郵送料の節減を図ります。PDF 版はカラーでご覧頂けます。メール配信ご希望の方は「メール配信希望」とご記入の上、氏名を明記して下記アドレスまでメールを送って下さい。既にご希望のあった方には 7 月号からメール配信を開始します。もちろん従来通りの紙印刷版をご希望の方は郵送致します。

メールアドレス：hrv2898@gmail.com (会報編集担当 松崎茂)

今後のスケジュール

☆水生昆虫調査 7 月 20 日 (日) (詳細は 97 号を見て下さい)

☆アサギマダラマーキング会 9 月 7 日 (日) (予備日 9 月 14 日)

集合場所：道の駅ひだ朝日村 午前 9 時 (車乗り合わせて高根町の旧チャオスキー場へ移動します、15 時頃に現地解散)

持ち物：お弁当、飲み物、雨具、メモ用紙、油性フェルトペン (黒・細書き)、捕虫網 (貸し出しも有ります)

服装等：軽快な服と靴、日除け対策 (帽子等)

☆秋の里山こみちハイク (城山～東山寺院群周辺) 『高忠の石造物をさがせ！』

10 月 26 日 (日) (小雨決行)

集合時間：午前 9 時

集合場所：城山公園二の丸駐車場

持ち物：お弁当、飲み物、雨具、メモ用紙、筆記具、その他

服装等：軽快な服と靴、帽子

高原忠次郎作の石造物を訪ねて歩きます。忠次郎は明治 25 年生まれ、吹屋町に住み、石工の請負業をしていました。狛犬、灯籠、石像、石碑など 29 件の作品がわかっています。

※問い合わせ先：松崎 (090-4214-5208、hrv2898@gmail.com)

ライチョウ展 +SDGs

5月10日～11日

ライチョウ展 +SDGs を終えて

住之義

私たちは、サクラソウやライチョウの未来をどう守っていけばいいのかをよく話し合ってきました。『守る』なんて大それた言葉は適当ではありませんが、今、何ができるのだろうと考えていたことは事実です。特にライチョウについては、具体的な策が見当たらず時間だけが過ぎていった感が否めませんでした。そんな中、降って湧いた？「**岐阜県の県鳥に指定されて今年が60年!**」のライチョウに導かれるように話が進んでいきました。

今思うに、チラシ編集会議の時期が大きな意識の転換期でした。色んな話が話題に上る中、「この熱量、これでいいんだ、この思いが伝わるだけでいいのかも?」と感じたからです。それからは来場者に少しでもいいものを、この熱量を伝えるにはどうしたらいい?とてもスムーズでスマートな進行ではありませんでしたが、各々頑張って企画制作に取り組んでいる姿は尊敬に値するものでした。

しかし、次第に展示会が近づくにあたり「間に合うのか?展示品量は多いのか?少ないのか?配置は?」と色々な不安がよぎるようになります。正直、展示品が展示されたイメージが湧かなくモヤモヤしており、2日前に展示物のメドが着いた時点でも落ち着かない状態でした。

いざ展示準備当日、2団体の共催という事もあり沢山の方の協力・共力で形になってい

きました。予定や思惑通りにいくとは思っていませんでしたが「想定内」での進行だったと記憶しています。評価は分かれるでしょうが、それぞれの個性・得意技を生かし最終的にインパクトがあり、流れもある良い会場造りができたのではないかと思います。

そして展示会当日を迎えるのです。ここからは会場に居た方は勿論、各マスコミ報道でもご存知の通りの混雑ぶりでしたので特筆することはありません。

反省や後悔は沢山ありますが、今回に関しては、初めての企画だったということもあり満足いくものであったと思っています。ライチョウを知ってもらい、身の回りの環境の現状を知ってもらうという目標は少なからず達成できたはずです。

6/8には大会主催の「乗鞍岳ライチョウ観察会」が開催されました。展示会の効果もあり沢山の参加者で賑わいましたが、残念なが



ら観察例が少なく 1 羽だけの結果となりました。見られなかった参加者も多く寂しい限りです。乗鞍岳でのライチョウ生息状況の悪化は多くの方が実感されて居ますし、減少を憂う研究者も居ます。しかし、最新のある調査で御岳では良好らしく、木曽山脈でも良い状況だとも聞きます。

一方、火打山塊は確かに温暖化が、赤石山

脈は天敵の増加が減少の大きな因子とされています。

乗鞍岳の場合は果たして何が原因なのでしょう？その把握のためにもしっかりと調査を行い、迅速な対応をしなければ乗鞍岳のライチョウの未来は厳しいかもしれません。危機感をもって国・県・民間で対応する必要があります。

乗鞍岳ライチョウ観察会

6月8日

ライチョウは美しかった

Antoine Perrin

母方の祖父母は毎週末登山するほどの山好きで、子供の頃は冬と夏の休みを毎年フランスの南アルプスで過ごした。スキーやハイキングをしているとよくキバシガラスやマーモットを、ときどきシャモアやアイベックスも見ただけ、生息しているはずのライチョウを目撃した記憶はない。日本にもライチョウがいると意識し始めたのはここ数年のうちだ。5月に開催されたライチョウ展に関わってから見たい気持ちが一層高まって、6日8日のライチョウ観察会に期待を寄せて参加した。

当日の天気は曇りで、ライチョウが比較的に出やすいはずだった。午前9時頃に健脚班20人ぐらいと畳平のバスターミナルを出発し、巡回を始める調査員の方にライチョウの状況を伺った。最近増えている天敵のテンや人を避けているせいか、目撃はしているが今年はまだ少ないとのこと。出会える確率が一番高いのは大黒岳らしく、富士見岳に向かっている我々はルート変更も検討したが予定通



カヤクグリ

りに山頂を目指すことにした。ライチョウはどこに現れてくれるか分からないからだ。

富士見岳の山頂からはウグイス、カケス、そしてアマツバメ。不消ヶ池を覆う雪溪にはイワヒバリ、鶴ヶ池では初めてのホシガラス、ハイマツの枝先からさえずるカヤクグリもいた。カヤクグリは私がバードウォッチングを始めたきっかけの鳥で、久しぶりに再会で嬉しかった。3時間ほどかけて6種類の鳥を観察できたが、目当てのライチョウには出会えていない。それでも十分楽しめたと思いながら、昼休憩のためにバスターミナルに戻った。

午前中は40人以上が3班に分かれて魔王岳・大黒岳・富士見岳を歩いたが、結局どれもライチョウに巡り会えなかったようだ。昼食は巣作りに必要な泥をかき集めるイワツバメを観察しながら食べた。ライチョウみたいに足が羽毛に覆われていて、ライチョウに会えなくても鳥は皆面白いと再認識した。

午後はダメ元で大黒岳に行くか富士見岳に戻るか迷いながら歩いていると、再び調査員の方とばったり。剣ヶ峰から戻る彼は、富士



見岳の山頂の裏側にライチョウのつがいがい
たと教えてくれた。まだいるかもしれない。
今回は残った5人で慌てて富士見岳を登った。

山頂を少し下った道脇にライチョウのオス
がいる。すぐにわかった。あんなに堂々とい
るんだ。繁殖羽のきめ細かい迷彩模様や尖っ
た半透明のくちばし先、ハイマツに囲まれた
岩の上のライチョウは美しかった。通りすが
りの登山者たちは携帯で写真が取れるほどの
距離で立ち止まっていた。ライチョウは人を
気にかけることなく、ハイマツに潜んでいる
だろうメスを守るように、頭をゆっくり左右
にまわし縄張りを見張っているような動きを
見せた。いつ飛び立つか分からないから、興
奮した私もカメラを構えて、近づきながら
1000回近くシャッターを切った。ライチョウ
に、ライチョウが生息している環境で出会え
たことに感動した。

しかし帰って現像すると使える写真は3、4
枚ほどだった。もっとゆっくりと距離を開け
て双眼鏡で見ているとよかったと反省してい
る自分がいる。

ライチョウの住む環境まで運んでくれた自
動車とバス。ライチョウのいる山頂まで歩い
た登山靴。ライチョウの写真を収めたカメラ。
化石燃料を頼りにそれらの製造・流通・販売・
利用を可能にする経済体系がライチョウを絶
滅の危機に追い詰めていることは、分かっている。
極端に言うと、氷河時代から1万年以上
生き延びてきたライチョウを、乗鞍岳へ見に行
く行為がライチョウを危険にさらしている。

ライチョウに出会う感動を人に共有したい



Antoine Perrin さん撮影



Antoine Perrin さん撮影

し、できれば同じ感動を味わってほしい。そ
うしたらよりライチョウの貴重な存在に気づ
いてもらえる。でもそうするとライチョウが
より危ない立場になり得ることもわかっている。
本当に難しい塩梅だ。それは一人に決め
られることではなければ、一人で決めて良い
ことでもない。そしてライチョウに限った話
ではない。だからこそ、できるだけ多くの方
とそういった意識の共有や議論のできる世の
中にしていけたらと思う。

乗鞍岳ライチョウ観察会に参加して

岩井香央梨

今回初めてライチョウ観察会へ参加しまし
た。3つのグループに分かれてライチョウを
観察しに行くことになり、私は大黒岳を周る
グループで行くことにしました。

この日はとっても良い天気で、青空が広が
り清々しい空気でいっぱいでした。ただ、こ
んなに良い天気だとライチョウが出てこない
かもしれないらしく、少しドキドキしながら
歩いて行きました。大黒岳を登りきってもラ
イチョウの気配はしません。鳴き声すらも聞
こえてきません。砂浴びをした痕跡は数箇所
あり、この辺りに住んでいることは確かなよ
うでしたが、全くと言っていいほど気配があ
りませんでした。

天気が良すぎたんだな、と少し残念な気持
ちではありましたが、バスターミナルへ向か
う途中で、ルリビタキやウソの声を聴けたり、
カヤクグリが近くで囀ってくれたので今日は
もう充分だったなぁと思っていました。

昼食を済ませると、午後からもライチョウを探しに行く方々がみえたので、私も仲間してもらい、大黒岳周辺を歩きました。すると、乗鞍岳の調査員の方が「20分くらい前、富士見岳の山頂を越えたあたりにライチョウがいていましたよ」と教えてくれました。まだいるかもしれない、帰りのバスまでは2時間ほどある、富士見岳に行くしかない！と、希望者5人でライチョウを目指すことになりました。

富士見岳は岩がゴロゴロしていて頂上付近の斜面もキツかったのですが、この先にライチョウがいると思うと頑張ることが出来ました。頂上にたどりつき、少し下ってゆくと人だかりがありました。その先を見ると、オスのライチョウがスッと背筋を伸ばして岩の上に立っているのです。

雪渓を前にしたライチョウの後姿がとてまたくましく凛々しかったです。ギャラリーが増えても、ピクリとも動かず見張りをしている姿に大変感動しました。

乗鞍岳に登るのは小学生以来のことでした。ここには素晴らしい景色と、厳しい環境で暮らしている生き物たちがいました。観察すればするほど興味深い、それぞれの生命の営みがありました。

近くにあるのに中々行かない乗鞍岳。また行ってみようと思いました。運良くライチョウにも会うことができとても良い思い出になりました。観察会に参加して良かったです。ありがとうございました。

人生初登山、初ライチョウ？

直井明香

「人生初の登山で、人生初のライチョウが見られるかも知れない」と、胸を躍らせ迎えた6月8日の早朝。5月に開催されたライチョウ展のためライチョウの塗り絵を描いた際、絵のモデルとなった丹羽宏さんの写真からまだ見ぬ姿を思い描いていました。朴の木平駐車場には各会員をはじめ、ライチョウ展やチラシを見て来られた方など総勢42名が集結。大所帯となった一行はシャトルバスに揺られ

て乗鞍岳へ。窓越しに広がる景色に息をのみました。人の出入りを拒むかのように雪を残して切り立つ山々は、どこにライチョウがいても不思議ではありません。

到着した畳平駐車場ではイワツバメが行き交い、目の前を通り過ぎます。ここを拠点に、健脚を自負する人たちは富士見岳へ、自信のない人たちは魔王岳と大黒岳に分かれて散策すること。運動不足を自負する私は迷うことなく健脚以外のコースを選びました。野鳥の会飛騨ブロック代表の直井さんが「今までの観察会では毎年ライチョウを見ることができました。みなさんもライチョウの気持ちになって、どの辺りに居そうか探してみてください」と話されました。

大黒岳へ向かう私たちに、野鳥の会の方々が丁寧に説明。「あれがアマツバメ。羽が鎌のように曲がっているのが特徴です」「これはライチョウが砂浴びした跡だと思います」。道中ミヤマキンバイが咲いていることを教えてもらい、その愛らしい姿に感動しました。ライチョウ展の塗り絵でミヤマキンバイを描いていたからです。想像していたよりもずっと小さく、けれども群がる様は逞しく見えました。

午後、富士見岳に向かったグループからライチョウを発見したとの一報が。一同にわかに色めき立ちます。わずか数メートルほどの近距離で、片足を交互に上げて立っていたそうです。残念ながら私は見ることはできませんでしたが、不思議とガッガリはしませんでした。とはいえ、やはり自分の目で見たかったので、また来月リベンジしようと決意を新たにしたのでした。



山本峠—桐谷集落の人が古川の町へ行く時越えた峠



大阪峠（十三墓峠）の登り口である高山市国府町八日町集落から、荒城川沿いの道を1キロほど下って右折し、橋を渡って1キロ北上すると、山の中に桐谷という集落が現れる。30戸に満たない小さな集落だ。

桐谷という地名は、山桐がよく育つ地というところから付けられたという（『国府町史』）。ここには、鎌倉から室町期に栄えた清峰寺の奥の院があった。

この桐谷集落から西の山を越え、最短距離で古川の町に出る峠道がある。桐谷集落の人だけが利用していた短い峠道だ。下った所が国府町の山本集落なので、桐谷では山本峠と呼んでいた（図1）。

〈探索記・聞き取り〉

令和2年6月29日・令和2年7月1日
国土地理院の地形図にまだ点線が残っているので、梅雨の晴れ間に行って見た。

桐谷集落から峠の方向へ林道が入っていたので、地元の人々の許可を得て動物除けの柵を開け、車を乗り入れる（写真1）。道は奥へ行くにしたがって草に埋もれており、近年車が入っていないようだった。

林道終点から、尾根に向かってつづら折りの道を少し登ると峠に出た。そこには石積の上に立派な地藏堂があり、そばにはヤマアジサイの紫の花が咲いていた。主尾根



（写真1）



(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)

にはしっかりした道がついていて、安峰山まで行けるらしい（写真 2・3・4）。

地蔵様に拝礼をしたあと山本側をのぞくとしっかりした道が残っていたので、茂った草をかき分けながら新緑の木立のなかを下る。はじめ尾根通しの道だったが、途中からつづら折れになって谷へ下っていた（写真 5）。

谷へ下りたら、山本集落の最上部の小屋が見えたので引き返す。

桐谷集落へ戻ってこの峠のことを聞いて

みた。畑仕事をしておられた 91 歳のおばあさんは、「春にアズキ菜を採って古川祭りに売りに行ったよ」などと、なつかしように話してくれた。

別の家の 85 歳のおばあさんは、

「峠を越えて古川祭りや、忠霊塔の藤を見に行ったな」

「子供を背負って病院へ行ったこともあるよ」と、話してくれた。

T さん（77 歳）は、自分が小学校 3、4 年生のころまでこの峠を越えて古川祭りなどに行ったと話してくれた。

他日山本集落側から入り、集落最上部から林道を先日引き返したところまで歩いてみた。ここにも沿道に紫のヤマアジサイが多く咲いていた。

この山本集落には、高山鍋山城主であった豊後守安室（あんじつ）の墓がある。

戦国時代、南飛驒から侵攻してきた三木自綱に城を落とされた安室は、この集落まで逃れて切腹。集落入口の谷の横には小さな五輪塔墓があり、そばに切腹した時使ったという平らな石もある。今も付近の掘之上家とその墓を守り、菩提を弔っておられるという。

この小さな峠道も、昭和 30 年後半に国府側から自動車道が入ってから次第に通る人はいなくなり、今はヤブに埋もれつつある。

なお桐谷集落の北方には、神岡町柏原集落へ通じる「桐谷峠」があり、今は林道が通っている。



(写真 5)

乗鞍岳西面の登山道＝「岩滝道」の丸黒山から千町ヶ原間の整備が完了

木下喜代男

題記登山道について、近年笹が繁茂して通行がかなり困難になっていましたが、県へ働きかけた結果、昨年（2024年）整備が完了しました。

大正期に12本（この時点で廃道に近かったもの2本を含む）あった乗鞍岳飛騨側の登山道は、戦後バス道路の開通によって次第に廃れてしまいました。この盛衰の歴史については、2015年発行の『くらがね通信』61号、62号に詳しく書いていますが、その時点で通行可能なのは「平湯・乗鞍新登山道」、「青屋道」、「阿多野道」の3本だけとしていました。「岩滝道」を入れなかったのは、直前に長倉谷遡行のあと部分的にこの道を歩いたところ、通行が難しくなっていたからです。

その後拙者は、2018年8月30日に剣ヶ峰から千町尾根を下り、乗鞍青少年交流の家までを歩きましたが、笹が繁茂しているものなんとか通行できました。このため、2021年に上梓した拙著『飛騨の乗鞍岳』（岐阜新聞社）には、通行可能なのは「平湯・乗鞍新登山道」、「青屋道」、「岩滝道」とし、「阿多野道」を入れていません。

「阿多野道」は、地元のボランティアの人によって笹が刈られていましたが、その後繁茂

に追い付かず、埋もれた箇所が多くなっていたからです。これは拙者が、2020年黍生川を遡行し、下山路に「阿多野道」を使った時に確認しています。

話を「岩滝道」へ戻しますと、2018年拙者が歩いたあとさらに笹が覆い、2023年やはり剣ヶ峰から乗鞍青少年交流の家まで歩いた知人が千町ヶ原から丸黒山の間で道に迷い、下山が深夜になってしまいました。このため、この方から拙者へ整備の相談がありました。

この道は岐阜県の管理（「日影平乗鞍岳線歩道」）になっているため、拙者が県への請願文を作成して山岳団体事務局の了承を取り付け、岐阜県山岳連盟会長、飛騨山岳会会長の連名で、県環境生活部政策課長宛に送付しました。（写しを高山市環境政策部長へも送付）

これによって早速その年に予算化され、翌2024年朝日町の業者によって全線笹が伐開されました。

なお「青屋道」は高山市朝日支所が毎年少しずつ伐開し、千町尾根の延びていたハイマツも近年伐採されています。

会員諸兄は、広大な千町尾根、飛騨の尾瀬ヶ原といわれる千町ヶ原、鬱蒼とした原生林のなかの「岩滝道」をぜひ歩いて見てください。

☆ギフチョウ自生地の下草刈り

10月18日（土）午前10時集合

集合場所：清見町池本の西正寺

詳細は次号でお知らせします

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000円 家族 3,000円 団体 5,000円

あなたの知人、友人に入会をおすすめください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 98 第号（深緑号）2025 年 7 月 1 日 発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

下記 URL のページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★ <http://iidalaw.net/kuragane.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail：ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp TEL：0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜 印刷：山都印刷